

桜蔭俳話会 十一月句会(第二八一回) 於桜蔭会館

平成二十一年十一月二十二日

- 4点① 秋天の青もどしたし白内障そくちやう 与史
- 3点 われよりも母を知る妻初秋刀魚 貞勝
- 2点① 正装に照れしポーズや七五三 溪水
- 職を退き名札代りの赤い羽根 貞勝
- 一声を枝に残して百舌鳥去りぬ 溪水
- 音たてて冬の噴水もつれけり 秀一
- 2点 ネットタイは締めず勤労感謝の日 守
- 松虫に耳疑つて耳澄ます 貞勝
- 有限のなかの無限や冬の虫 守
- 刈込みの刃先鋭し秋の冷え 溪水
- 小鳥らのためらひなく来手水鉢 ヤエ子
- 1点① 山粧ふヘアピンカーブのいろは坂 貞勝
- 大奥はここらあたりか草の露東御苑 与史
- 1点 縄跳びの手首ゆつたり冬日向 秀一
- 山葡萄垂るる急湍カヌー跳ね 貞勝
- 風呂敷はとの空解けて風に文化の日 幸
- 冬花火淋しき手紙したためり 秀一
- くちびるの少しかはきし冬に入る 守
- うそ寒やパソコンに向き話す医師 与史
- 银杏黄葉に女子マラソンの白き股もも 与史
- 秋の日や屋上ぎつしりソーラ板 ヤエ子
- ※ 流感の予防接種に列うねる 与史
- 鼻挿はみの紙こんもりと秋微雨 ヤエ子
- 美術館見て紅茶飲む文化の日 眞三
- 秋淋したちまち荒れし元の畑 ヤエ子
- 納豆も妻と半分夕餉かな 眞三
- あばれ仔猫頭突き破りの白障子 幸
- 夫漬けし形の揃ふ赤かぶら ヤエ子
- 枝の花ここに有り朝の庭 文枝
- 身構えぬ小春の猫の間合ひかな 秀一

- 新聞を受けよりとりて今朝の冬 眞三
- 新松子浅野家へ手向け百合の花(泉岳寺) 幸
- 口中のキャンディ溶くる小春かな 守
- 吐く息のかすかに白く冬来たる 眞三
- 花八ツ手固まりつつも一人づつ 文枝
- 行く秋や地蔵の頬の引き締めまり 溪水
- どんぐりを拾ひて童のポケットへ 溪水
- 山茶花の花満開に留守の家 文枝
- 山茶花や博物館に整列す 秀一
- 冬菊の黄の色めざし坂を急ぐ 守
- 東北道行けど行けど十一月 文枝
- 秋茶手に歩を早くして丘の施設 幸
- 挨拶しきりりとしまる朝初冬 眞三
- りんご一つ渡されし手冬うらら 文枝

不在投句 (瀬戸溪水、野上貞勝)